

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN



門ル4  
4905  
1

二山稚集序

大佛

稚從緣起とい吾宗より生す事小すもあふ事

神乃

ほよ。おぬをめざすのゆくをも事は能ひ

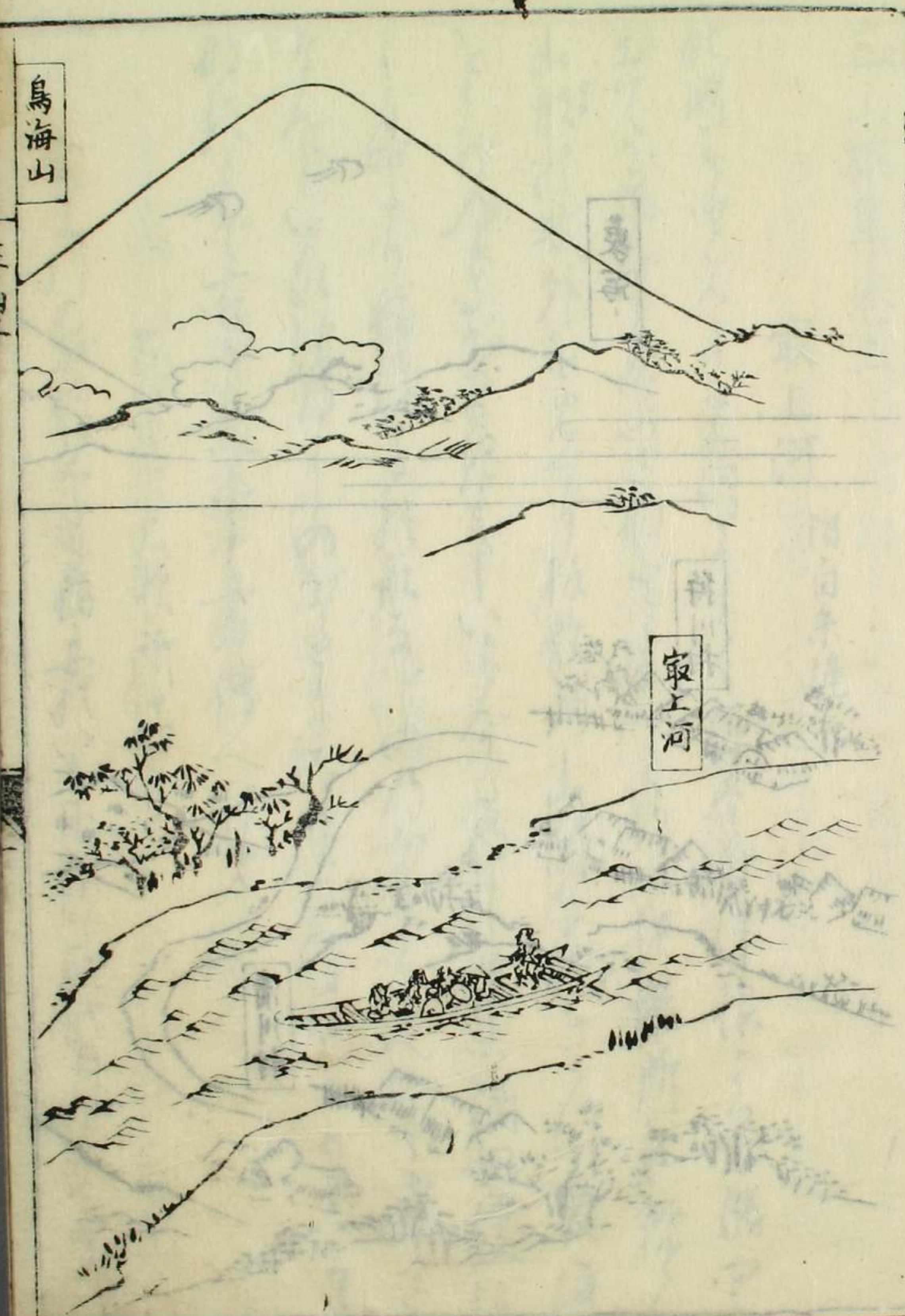
能む是善因なりて事は事能ひ先駆つゝをや  
于茲三山事實稚現れ夷威、久萬歳已往の舊跡而、  
宮祠寺院其規模書了紙一傳ノ記もとの若干筆  
少しくも土地方畿小を乃ち邊境乃息な處との稀  
少してむろく世不あれば龜置ヨリタハ而藏也ヨリタハ山下  
社駿者巢雲嵐呂茹あすねく國原茂めぐり武陵乃稚士  
もく成慕ひ廣前奉納の勺スを形ひや満々古手アシ後小  
集外か門梵河の貴ニ流残堂ヨリタハ山谿の多野と

心事あくに画書物めりと今乃詩歌耳目ゆうふ  
残去了へねえやう骨房小うすままで是の序をうしやと  
りよいとゆきとをかかへて語れぬるトヒ卷を閲する  
宣下往昔より松一郎の原中村千三百ヶつ微の中乃微  
かねとも大抵革用のぬ事より小うすまでも繁撮要ハ  
石川君の袖にてアラヤヒツムと墨でゆつれいり  
みとひらきんへちたもり童蒙の目ふも影くタニミトツ  
シヒ仰れハ船の日或は年代の怪なるをも阿蘭陀由來未考  
キといふことを仰れいや神威乃貴賤ありこの中了志  
城伏毛翁者豈敢丁年数アカモア信夫キ誠信セド特信  
せどもふと信をベリシヤ一キアヒモ歩哉運氣の山獄の瑞氣

雄現其靈光視聽可幽也可不誰の信乎歎をうむやびく  
歴代の彰方よもづくわ人情の辟固哉りうその事とひよ  
蓋君子は和協をすがり故曰愛而幫其惡惡而知其善乍  
あらばり其幼學やけりれと初久危碑計一句夜光ヨリビ  
入事以て堪能乃又原月リ行腹以てうけられも又道  
あくべれ一無可取一想が第ひよもく寝誰ともよもく  
了善ふ人の瓊やす一これおれの後の識者ニ譲り  
みう見聞け。此四行半から残往詔者其小補よ梓ノ鑄  
よもよもく三山雅集と題もとの名傳くあやく一々  
おぞれゆきと後ふよこれ若然其事小えゆれ漸以あゆくと  
運才乃合す。傳ふトホレ讚佛乗乃善因し。よせよ

つやつゝい憧憬僕主と残星乃鼎下へ荒澤の半流  
と汲み後夜社が下り酒田乃簾茶哉拂して一碗二碗  
ト呑べば惟二人兩腋有清風のまゝ事のよきをぬ

荒澤野納東水書



三山雅集卷上

寂上河

附白糸滝

此國乃すもよの内すく源を會津根もすに瀬  
出でて三重を度あき野を云ひてひりに難所は經  
山形れ城外を東ぐに移敷乃山間と抱き合ひ衆流  
とけ今もすれ事すいと今れ一里を酒田の邊  
ノ峰より縮ほよれ取手の内がよもゆくす  
すんじゆはわうのうすとせこの内もすとす  
取手とすすす文小を書候へけ

東山集大歌所は年

寂上川のがれどす縮れいと下りに背もゑ

東海

舟川村

清川村

後撰戀四

三條右大臣

まよひに津原小りひの船舟れはうくとゆる浪る

千載難下長歌

後賴朝

すくいに舟内岩と涌く下略

續後撰松翁戒中  
自費毀他

寂念法師

むかひ河人を手そく船舟哉之を生て沉じゆく夜舟

續古今文

前門大臣

の前舟は昔ひき舟を今舟に引け舟乃舟あらうて

夫木集

雅經

もくの門舟ひだりかじりの舟のが行ちくすの

新後撰難中

藤原嗣房

の舟舟のひだりひを舟と舟と舟と舟と舟と舟と

續千載夏

前閑白太政大臣

室との舟と舟とてあらあはせどもわしひねまつ舟

新舟

後撰難中

後舟

りかの浦にせうれ船舟の舟をとふ思はず

新舟

鴨宿

もく舟と舟と舟と舟と舟の舟と舟と舟と

同上

友原相如

ひくい都のふりかの月にりのいわえつれと

新舟

有家

家と舟の舟と舟と舟と舟と舟と舟と

新後拾遺

後鳥羽院下野

宿の門の下とあくまじめ宿をもつてけりはとせんとひむ

因上

道因法師

とかのよりとやうね縮あればあら風ふごと往でかうと  
貞享のはうい羽黒山別處藏を寄りて入虎の  
わざじゆきよらして僧正龍海

いぬ船のやうのとおとすとあはせれあはれと  
縮舟の津木小流のやうとあはれとあはれと

麦刈と縮すひえあよどく

川 貞徳

奥羽行脚のあら

まみどりとあらやまとえなか千川

芭蕉

門に至るて歸るを神とすとゆるの

其角

得とがふせれ中とすと経穿うと川

京 惟然

やくまを朝里乃顛れ覆はれ

出雲 浮生

里底とく底とく底とく底とく底

風水

内よまねけれゆうととがふせれ

出雲 酒田 吕九

船とまく船とまく船とまく船とまく

桂奇

代旅船や船小舟自らと門

出雲 酒田 茂伴

氷れ船小舟乃競ひやとまよし

出雲 酒田 茂伴

涼一さの再びにやりとかかるうへ

出雲 酒田 茂伴

縮舟小馬移ゆくと

此紅

轡風れ名の歸まつて水肩

出雲 東水

鶴鳴ひる鳥なりたりと寂上川金山風  
初轉や乃は扇の船今呂船

宮之門をすねて右の断岸千尺の小緑樹のひめ  
のまゝ向へ瀧りてえの山の向糸の瀧下りれ此のの  
と下よさつし瀧たゞの瀧下り四十ハ瀧柳風也  
源義經城瀧波瀧くは生すすらすらの瀧を  
久の内あれ瀧を君く供す奥奥りうる女房の  
うきゆうす

宮之門那れも内よりれどもすゑの向糸の瀧  
向あれ瀧やあくるよとこうろてん桃隣  
故門と事のゆれあやたゞの瀧入柳風

清河 附五所王子

庄内領地北齋谷ありいふア乃接寧半壁もげ下り閑門と  
まへらきりもや今と城主より町田とされ往く往く  
改す也改すもゆきす風も春秋はわすもすげ  
久れハ譲す清河すとよもかくせり

さよ門や深野がう乃通の寺山形桃陽

鄧公役浦谷へし庵はくも羽黒東水

村の上ア小字は官地あり是すより五所王子より  
それうも義經下向の野ア弓箭太刀鎧革またばく  
奉納とり今小字門と累代の作物と

鶴鳴け故後翁を名乃花呂船

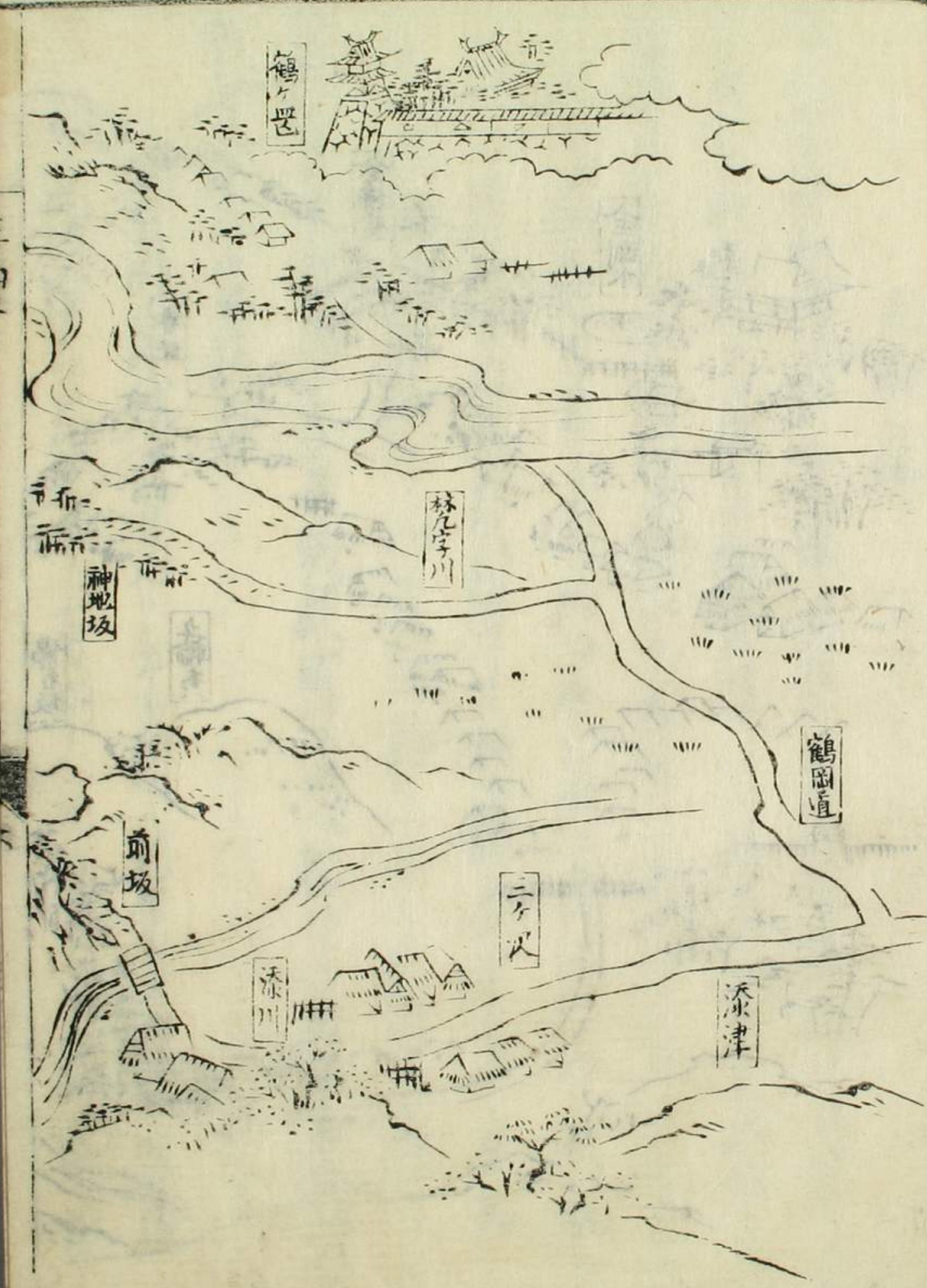
星川宿門へ云里アリ即ち鶴見河よりの驛路アリ  
ヒトハ鷹門とも云ヒテ此處はなまく云村有モ  
猿川村アリ即ち猿川山シテ加茂宇ト号シテ羽  
黒八千余間越中守りケル也すん上旬館ツイ館の  
役あり上旬代主ト來ア記ト

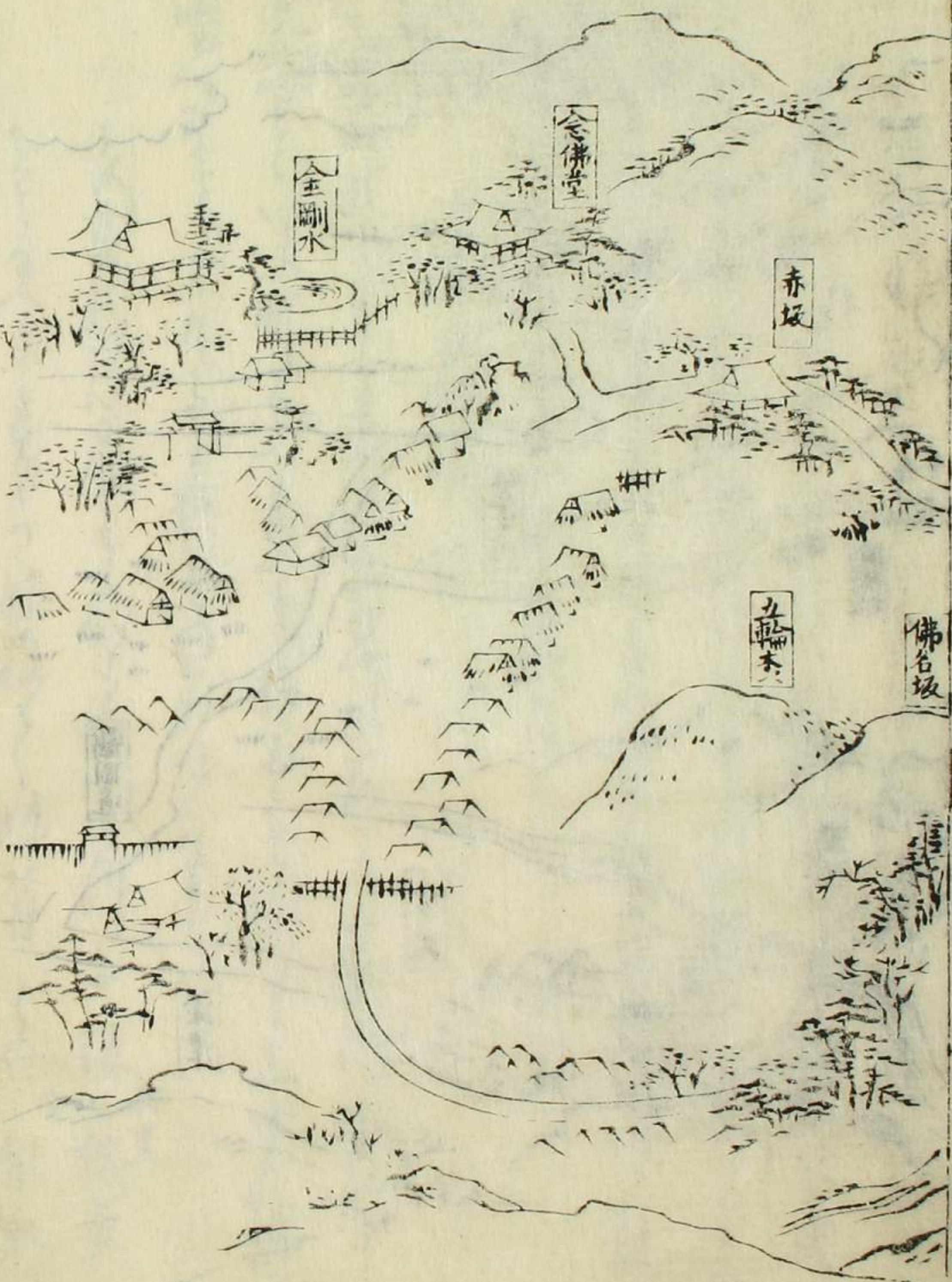
佛名坂

内ノ里右近アリ又アリ直入は取子寺藥師堂アリ今  
ノ向とよ町もづき移モシテアリニセモ佛名  
ト唱ヘテアリムモヤモのねゆ、

衣裏れ月扇アリ物モヤガリ坂

羽里  
獨步





五輪森

萬葉の後れば、既より佛名傳焉の廣瀬野の成建と  
多事あらずして此を秘密澤宿便あれせんす  
經廻戸乍ら云舊跡遂一小もよきと

風物を希ナリ然も一徳庵のつる此紅

前段

而れ段とて向れ町へ入ん松づの村より移り  
出する人家所

正門は是を矢立自立年より旅宗因  
作種を藝うる有明 章より配 江戸  
凍雪

飛すふれ食ひて頬へ歎やりうれ 仙化  
上件所へ徒家上趣干羽黒山路筋也

鶴岡

乞うりひ又越後國守野川羽黒へ鶴の道筋筋やげ不  
酒井左衛門尉城下也古に領主小一城中郭外武  
家やとしの井小工商也あく懐恩おもてまじかくそんぐ  
絃歌比喧嘩アマハキテ市人の言語鶴サギモテ鹽軍  
乞隊下乃内七町といひ不旅人の驛舎ナリ又の  
事小々入判をあくままで山への生達とまつて羽黒之  
おどりしく唐

梵字洞

城下と出る御手水川あり往昔湯殿月山社若の漏  
入り弥陀大日觀音乃梵字この川下流至下さに  
有り今よりその名成流布して移住すよりは  
門をと鳥居川原よりすじう羽黒一乃華表  
うちりきり

詠すみ代宗と傳 梵字川 助叟

もひり柳や捨舟まじ字こうま 一蜂

惹れ御もそれ野り保育字河江戸倫今：

摩乃空魚尾也禽鳥爲小梵字山形倫芦

青柳や乞はゆめにがゑうよる窓柳

壁も阿吽ぶとめれりん 一門

朱沢 九

活々と遊魚や夜の保む一泊 會津 茅水

以て身を周月御令りて一泊

川内幸トレ

詠きばそれ不す不立と移縄川 東水  
水れわらる奈れ御宿候る李山

まうバニ角、相也 已可角 吕茄

久門

川をわづり向く久門より不あり音、久門代厚主  
ト何、乃事よりあらじて嘗めり羽里成信仰、左  
能除太子了第依て西南乃方より母侍山金嶺  
山人ゆる赤門村松尾村祖貴布齊、羽里アリ由故も  
不なりわから酒田袖浦乃眺望もひら海山

と見る

鷹か一馬ハ波ねど 霧比家浮生

食あしありや松尾れ相國雲 暈然

流瀉るれ名すよす萬乃義外 吕茄

酒田 異袖浦

酒田み多居ケ崎シマツキ、代物りて城主の領内小  
して此下少い一海あり西國方運送れすよ成る  
濟小一萬戸度アツカタ且普内様アラタナトバ別に  
海濱ノ袖乃袖あり

拾遺五

ゑあす代乃の袖の海は多門事も行ふねば

金葉雜上

平康貞女

すまゆきのうらはぬ乃とすまゆきのうらに袖の浦とすまゆ

新古今雜上

中務

袖の浦とすまゆきのうらを袖の浦とすまゆきのうら

新勅撰卷四

前閣向

うや島とあくわう袖の浦ひら石すまゆきのうら

同上

侍從

うりゆれ雲れう浦とすまゆきのうらを袖の浦は

後後撰卷二

前原通憲

君すすす浦と浦とすまゆきのうらを袖の浦乃とす

續古今集一  
參議雜經

うすりや大い心とおま門浪行すまゆきの浦れ浦風

續拾遺卷五

常盤升入道

あけづと袖乃とすまゆきのうらよりへづとすまゆきのう

新後撰卷一

觀部威彦

袖の浦と浦入石乃と浦はくとすまゆきの浦とすまゆき

同憲四

高階家成

うすりや浦とすまゆきのうらを袖の浦とすまゆき

同憲一  
二象入道内大臣

うすりや浦とすまゆきのうらを袖の浦とすまゆき

同憲二

前衣織物有

ありと衣ねねの袖のうへて、アハウラガシホトト角

同上

為道御臣

うせ下る、袖れ浦源行て、お人全て胸た、松るりれを、  
うせ下る、袖れ浦源行て、お人全て胸た、松るりれを、

同上

徑ニ位親子

うちの下、袖れ浦源行て、お人全て胸た、松るりれを、

同上四

龜山院御製

年月乃あわは、まほがひて、むきもく袖のうへ

新千載秋

友原宗泰

簾陰の袖乃、風をれ、やま下、室あ衣うけん

同憲二

雅士納言公忠

うそ下り初め、うそ下り初め、うそ下り初めの浦

新千載春

法平源意

和とよとよ、行とよ袖の浦風とよあつてはれ花少、とく

同憲二

高兼

葉れうかく、余下我せり、ゆく、腰平、あらぬ袖れ浦

新後拾遺春上

御製

春よねと、我そ、余下我せり、ゆく、袖れ浦のうへ

同憲二

正三佐知家

曉代別里、いはまや、衣ぬれて、そひ、袖のうへす

三三

新續古今集一 洞院攝政あた大臣

通ひゆの邊すもあはれぬ爲め貧窮経年もる袖乃く風

同上二 源家長

着小舟にて舟をさかうてゆきあれどとあれ袖の浦流

同四 椿森惟貞明

立浦りあく事とねほそぞゑの野牛の浦の袖乃く浪

同五 平忠房

臺子舟以てよしんほくまね方やどてゆき袖乃浦波

同上 進子内親王

食人を玉原うりほを袖乃くにまきわれねほの

同上 一条兼太政大臣

そゝの御殿乃處うりゆく我うみの袖れうぢがみ

同上 仁宗

權大納言經豐

あゆ入れ衣やまともす雪ふはれせかひ袖の浦浪

名所百首の中うり島民

法平寺吟

馬鹿ひうすとおれまき袖えうけうす袖乃く浦

日、船宿くいのうす處をま様衣たぬくと袖の

まくらう遊行入げ下りゆく

かくす小蘆屋の跡あづびれいゆく袖乃く人

遠望

あはるよやぬ浦うけくタヌマシタ  
昇る日成海ノ入キリモカ千川 全  
島上アリ堂主とおーく日本アヒトモ  
御くされ、月と夜と乃あるニテ乃ヨ 沽洲  
紹巴ヌキ袖とシテガト、海れ内 呂光  
乃シテレヤ裏トシテ袖乃空庭 尾花沢  
清風

鳥海山

あの山鎮坐の神一記多々大物主神社といひ有りその外  
山内の事、實高記未詳所覽、もぐくまの、康平  
年中、栗屋門派御安侍貞任、同宗任又通の時、  
乃からし富士の海波やく九萬石を以て築雪班駆  
り立りあれ玉乃中かてて二のまちよい  
嶺也スルモノ識之。

附あらわ山より葛の根水アリ解 淳生  
雪れ鵠の雛ト巣すり立との海 風水  
島乃海アリバサシテ、ねむり不玉 酒田  
毛鳥やさうたのあれあり、際 翁  
雷れ波し畠合やとうたの字矣 武仙  
琉璃光乃木本葉ナリ、是れ山 吕船

象深

多海山底少くまづれを象深すり能因法師が幽玄の行  
西行上人乃老ゑれ得九十九の鳴八十人未深れを  
以て謂ひ空をばそり作れ此景はぞろさんと此園  
乃名也さうなれば席をゆく道もと詔との神功  
皇后の御隱ニオヒありまし千滿珠寺といゆりそれ  
縁因ゆく

後拾遺族

能因法師

せの中ちかてし縦りうち深の臺れ皆空と我宿

利古今旅

顯仲朝居

既下る我身小もあれ、殊遇や皇氣涌や高き旅の

西行法師

在在深れ得須まく御身花のとく、臺れはうれ  
乃アリの行脚よ遊行上人  
前より思ひをそえ、盡得れ得須小松風か  
江上れ縱横一里もありかくて、併れね鳴よがひて又異  
なり松崎の先よがまごく、則深き恨じふごく寂さく  
懸一木成く地勢難波のやまく小竹うら浪  
乃すくよおれゆうとく

毛所深乃月夜漏人よまくとけよ

秋澤菴

望うれ雨や西施が合歡のそれ芭蕉  
汝うや唐脛の経く海すべし今

旅度で日月え賄 小松 一晶

西行稀事なれ圓小笠 沈了り 三千風

鶴丸殊々くる所ゆき到乃海 山夕

浪誠わ翠りあうくや 離鷺の巢 曾良

麻葉とく園庭とゆされみちうり 凍雲

水やせし翠乃生絹すじらげ 吕丸

蝶はや鴨は縮りくうとうかと 則堂

さめくや霜はよすの尾をひと 舟川

蝶深や首仰出モ尼られ蚊居 清風

辞けきよほく身寄く汝乃あ 東水

三弓深や萬小引玉をやうぬ 吕茹

八乙女浦附熱海

是浦の蝶深乃續焉やあくま羽黒擅現此不う瑞光  
と輝。山頂アリ拂りす。終よす。則海中余石立  
島居り。今小丘に立。月夜。星河。  
といやうれ。東もこの沖アリ龍灯アリ。それ出く。天  
ノ鼻アヌ。海よす。爲くその鬼渴。とり。防不恩讐  
壹丸寮アリ。及至んや。むね。修。験。入。事。乃時言も  
羽黒山アリ。遠。釋。の靈地也。

八乙女娘れども。あまう那 清風

笠手アリ。汝。歌。ハ。琴。れ。月 東水

是。う。南。ア。礁。多。す。出。れ。熱。海。と。う。一。邑。あり。小。海。小

近ノニシテ土事ノ草洞アリ。海れゆうり温泉  
漏出ノ諸病と治セ。苟ニ奥羽兩國代老乃遊賞  
乃佳境ナリ。

蓼原

藝

伏見

任口

源氏ノ林席代はり。改ヤリ。江戸

鶴里

右酒田鳥海ハシ女浦等記。途中遠望也。

荒河

是ハ往還乃路筋ナリ。門を渡ル。小字有森アリ。金澤宮トツヨ青奥州秀衡病死のち家嫡泰衡從  
賴朝命教義經於荒河館。賴朝又政泰衡正不臣之  
罪時即後照井金次ノトツが武士のよ。

人ノ作<sup>タチ</sup>。生ヒ畫ト一社ノ御られ。古見

ましめや男ノ役<sup>タチ</sup>。カ

東潮

経<sup>タチ</sup>。トモクナラ軍<sup>タチ</sup>。久武

是ナリ。峯門ナリ。ソノ村はる野荒町ト云。村ヘ出<sup>タ</sup>。右の  
方ナリ。玉門村トツヨあり。至成玉門寺<sup>タチ</sup>。寺ヘ羽美村  
鎮化小<sup>タ</sup>。玉泉寺<sup>タチ</sup>。天台山<sup>タチ</sup>。清瀧寺<sup>タチ</sup>。後  
ノ寺<sup>タチ</sup>。ト今ハ緋家の住處ナリ。有<sup>タチ</sup>。宝物<sup>タチ</sup>。今小所生<sup>タチ</sup>。

神<sup>タチ</sup>踏坂

ねれ<sup>タチ</sup>。主屋通<sup>タチ</sup>。向の町<sup>タチ</sup>。入<sup>タチ</sup>。神<sup>タチ</sup>

此山之理壁雨々々のれしにふたりへとせゆふを  
りくゑづけゆる。アヤ傳也。トリ

山体下ノ鼻う雨生す。脣尾等う風 東潮

入門や厄右石更生す。玉乃く。 天立

一步進高神地。坡 謹望<sup>タチ</sup>絕頂若盈科 令

羽黒

松風長入路人被酒掃凡情思不他

松涼一ゆきもと音<sup>タマ</sup>千人やす。 令

山乃序度是やあやどもね乃もれ<sup>タマ</sup> 令

白藤

中坂

坂乃る引<sup>タマ</sup>立石あり辨慶<sup>タマ</sup>碑石トヤ修<sup>タマ</sup>心

乃<sup>タマ</sup>在事<sup>タマ</sup>年<sup>タマ</sup>登<sup>タマ</sup>山<sup>タマ</sup>行<sup>タマ</sup>ゆ。 い<sup>タマ</sup>取<sup>タマ</sup>す事<sup>タマ</sup>も

赤坂

藥師堂あり。有<sup>タマ</sup>佛名板<sup>タマ</sup>。 トマ

赤坂やじう<sup>タマ</sup>乃<sup>タマ</sup>山<sup>タマ</sup>とみ

定頼

衣<sup>タマ</sup>門<sup>タマ</sup>も替<sup>タマ</sup>り多<sup>タマ</sup>。 十二神

李山

念佛堂

称名山蓮臺寺と号し、武陵代人ある。の爲<sup>タマ</sup>心  
修<sup>タマ</sup>行<sup>タマ</sup>して下<sup>タマ</sup>有<sup>タマ</sup>念佛の一宇を造建。今<sup>タマ</sup>は前  
信心帰依<sup>タマ</sup>者數十六時不退<sup>タマ</sup>乃道場<sup>タマ</sup>。 その境内  
あり。方墳墓<sup>カツボ</sup>ある。中<sup>タマ</sup>に原氏え應二年二月九日  
あり。 後醍醐帝の<sup>タマ</sup>墓<sup>タマ</sup>。 トマ<sup>タマ</sup>の石塔<sup>タマ</sup>。 人<sup>タマ</sup>うり<sup>タマ</sup>じ

山形

茶臼茶臼は、邊邊のもの、折尾折尾水

山形

滑河

念佛堂念佛堂よりあれと附筆也け多度八日町町云此町  
中了了流流よりより門門金剛金剛あれ未下未下

相手相手や合掌合掌下下大正正しげ山

羽黒

薰堂

戲戲や蔓蔓山山や、つりせん宿

尾尾次

窓

窓蓋窓蓋れ席席りみやげや、ひづつも直水

金剛木

金剛樹金剛樹乃地内地内下下いはずし今二十金坊金坊内内下下て

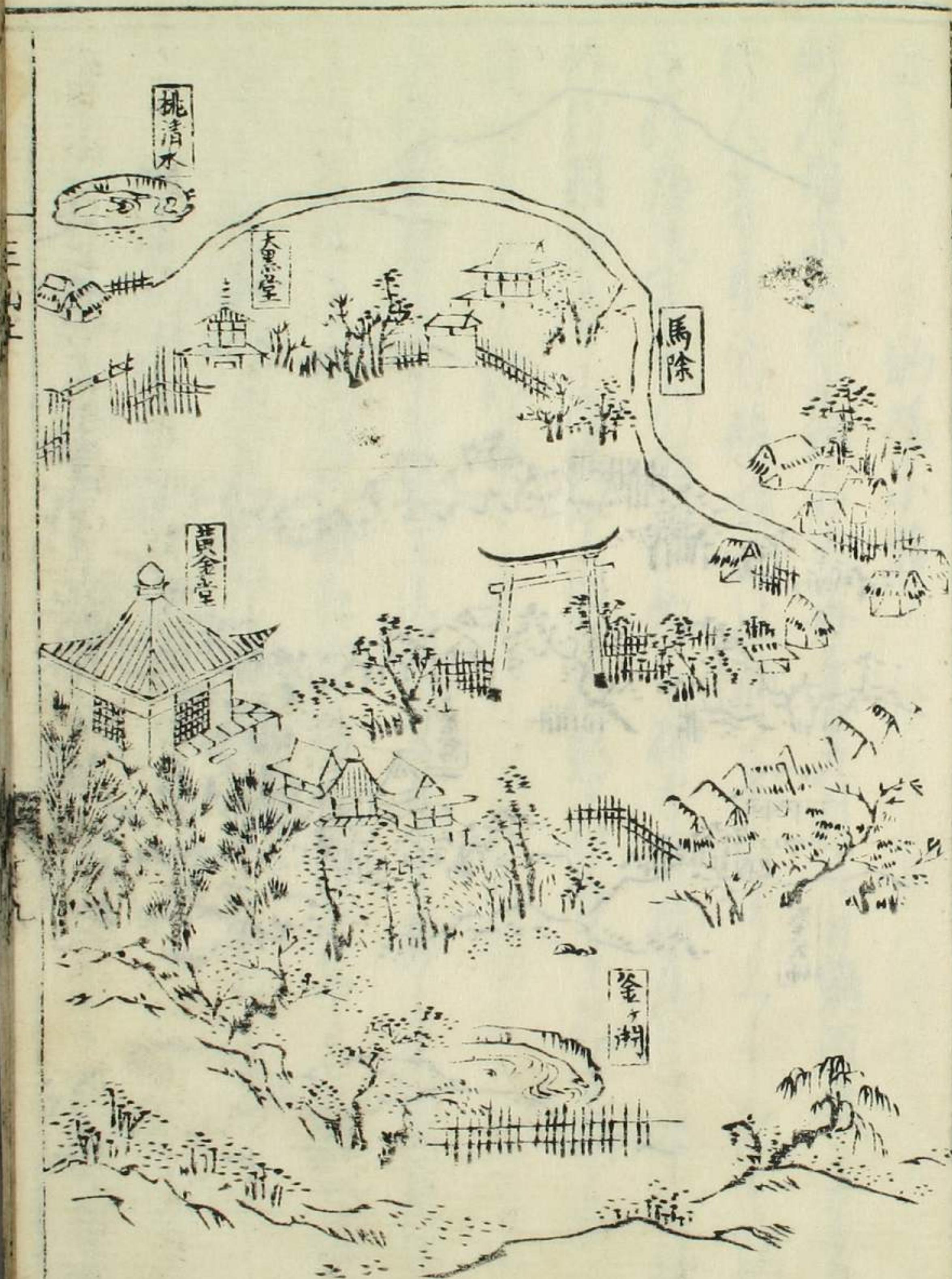
腰腰下下ありじう、來迎山來迎山勝勝下下く六百坊坊代頭

少少て異異驗驗れ僧侶僧侶住持住持今に東迎東迎池池ととす此  
色色なりされ、此清冰清冰と費費にゆきと乃修學修學の砌金剛  
堅固堅固乃かわばわばこちくかくくそくに吟吟水水を湛湛くりくく  
突熱突熱のわうわう人人れ頃頃下下ととあられ本本用用れを驗驗  
乃乃半今小時時くたり

中向館

ひう羽羽八千余坊余坊下下く一ノ時年中年中の経事  
繁繁多多下下て事務事務三人三人人と至至く一箇月月乃乃一箇月月中中  
旬下旬更更九日九日日のうちうち是後後二旬二二長使長使ととさり  
此而而中旬旬の人物人物多多中旬旬缺缺ととよすとと記記  
深深川村上上向向人人缺缺例例之之可可知知

富山往古より衆徒中山代隔々居住一修驗社家等  
七千軒余りの爲め故に後堂峰望不設鎌倉執權  
ふのうへ訴へ應奉停止ありく國民心こうたりる  
それが寂明寺時賴同周氏砌この山木堂托承任をば  
二十九年送り給ひ古記すあり後金乃西府のち  
富山の深顯は海津中將殿と號す中殿殿男子三人  
あり富山長史職と被補。一ヶ月小十日智りよ仕主を  
義成院と上中下旬とつと上旬家在大田氏中旬家  
在三澤氏神林氏下旬家在真田氏后住氏小蘭氏  
ナリ下旬家在近代某くあり凡そ凡ては常善庵  
云一人足りず



的場小路

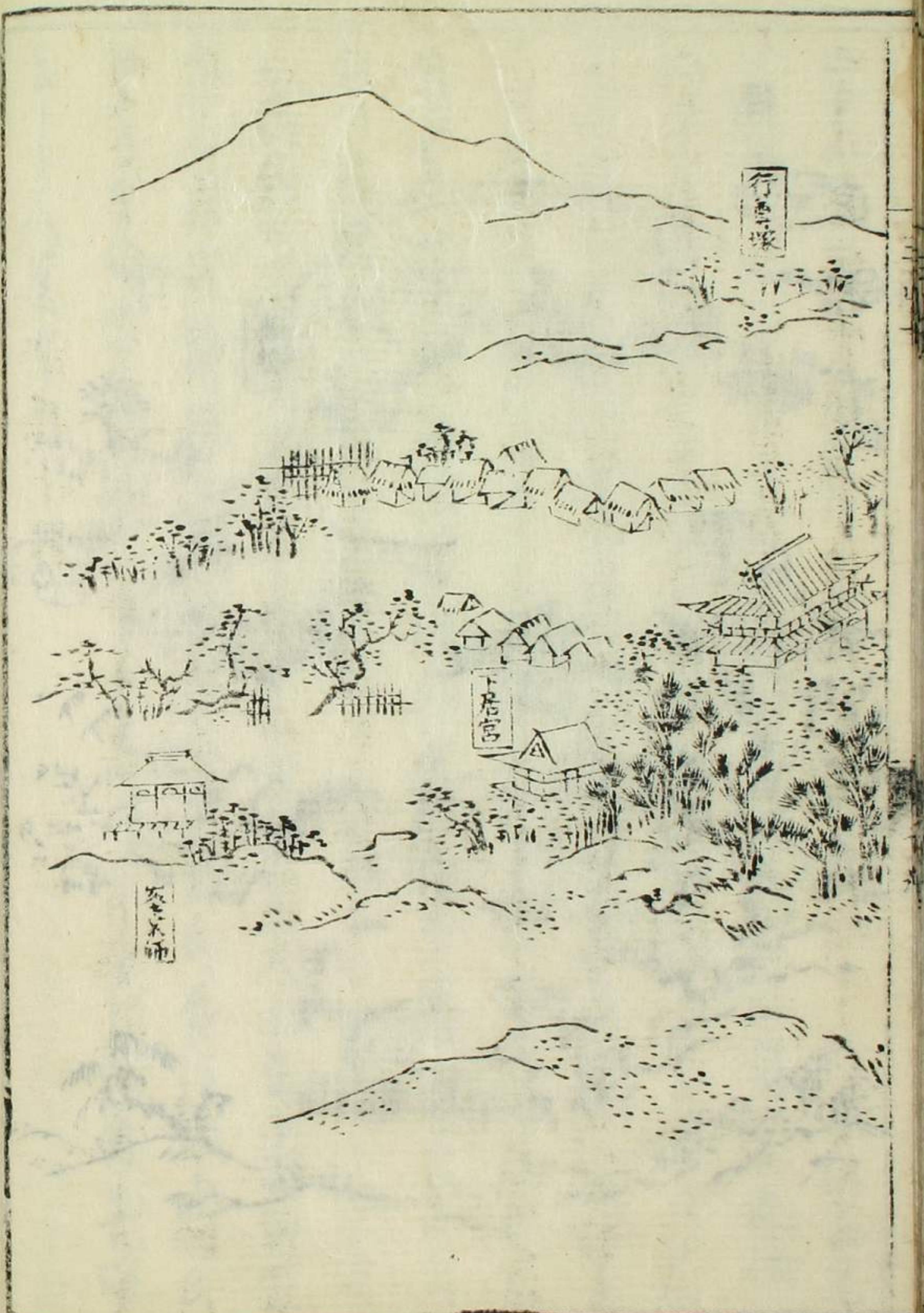
町乃角小の小築あり毎年九月九月鶴岡城主よりま  
行人等馬と流滴馬代神奉わりと記し的場  
古所角より先乃的場知と村なり松尾山と神領  
の内村より内余料成貯ひ坐と故實なり

地中

あれれじうも醫王山機乗すと号して五百坊ば鎮  
トシテ今ハ修驗在家等到ばすり石の築あり  
富山市住持天宥院中野刻の塔文あり

雷電石

つる角雷電吼喜彦月當矢す所と云ひ有り



ふの石今小所門人家れ背戸アリ不障子爾  
阿多モモ人多シと病はほりありものもよ雷電鳥  
ホトトガリジノノ國御水ナリトモトノ今より

石坂

あれ西山ノ往還人馬アリアリテナリシ道  
右の有リム是ドリシ下若山中宿寺すと/or音言  
宿乃瓊杵ナリクルトモトモ是シリム古事記云難  
モトム知トムヤハシノ物也寺也寺也

引籀堂

引籀れ弥陀如來急覺大師乃尼作不リ是ナリ堂社  
社く少してトトモ奉仰ノ後又同れ不日キ云

奇持焉ノ半あれシ無能也

黃金堂

應化堂より三十ニ軀乃觀音ハ貴ノ事ハ聖  
一まし則般若羅理二十ニ比應化身ト出家シハ  
シハ人草創いばれ乃はノ中來武將賴朝卿  
相良之仲遠名ノトモト上肥波郎時行奉行ト而有  
トモトモ影像今トモトモ堂ナリアラ像の裏ノ一漆書  
土肥波郎實平ナリ徳岡村トソノ不ト実平隊ト  
今トモトモ生ヒト生ヒ終クシテ

文祿年中耳禍傳後宇景次あれ堂度再興シトモト  
ヒトモトモ堂のトモトモ想輪塔トモトモ堂北後天神

松と周圍三ヵえ程あり二倍ありれ候事  
ありて五十年あり程の不枯木  
有り候らん候行まざくありふたり

花主の靈山際　聲如膏天立  
流季より一月廿日はの全獲不　李山  
りか附多き事小まれ全衣馬呂若

### 觀音堂

一面觀音なりあれ於主々下總國香取郡蘆田村  
伊能氏何事より者少して年比これ活山僧信  
久小司ノ以國東疫魔の妖孽ヨリコトハ不ふれ者乃  
家か一月二日代内牛二疋引り主ひ鷲  
愚のタレとし御力物を表れた事のタリ余國共  
の記する牛あるの事アラシタム。とおもふて  
折々う疫氣ト取れや。牛乃と之を小馬ト人  
アリ。其後一家乃内も愈々年々も疫神の難  
おもひ。それゆへて年々もやつて  
之乃山れ靈感を貴むる。て事ある。辛  
異の感と信りまちく喝仰乃心儀つてひげ觀音  
と奉納。丹誠追膺厚。神威是よ陽。とやつて  
追膺年れ事か。此堂の施主ナリ。と記す  
あらか。伊能氏といひあら身向うり。と。老子  
亡果れ追福と。保田西門。奇附され。

大宅三車は法事の為より年一  
いとうるを用意する。是れ

荷物貯へし所内車とのよしれ

東水

蝦夷古館

ふうね堂より下り彼の所あり従者蝦夷人アマコトにて  
事り住りてゐるので不動石と云ふ石あり來陣に  
給りて之を傳す

館や守れ萬事順々くむほき 東水

金清木

じつゝ大象舎の御用ひるた金堂中は萬で  
二門の金ありルリ一門は法事中にて御てゆゑ  
あがくと今からあがの堂代を小あり金堂あれなり

月7日 構局の薛の薛の也。先づ鶴里  
義らくや鶴も絳ふ。酒也。庵久武

正善院

黄金堂の別當たり是も二十余年院のそれより  
けちり御堂といふ人住居で、お種が院藏を  
辞す。布下の幽閑れまむ御事。其母すいとう能  
偶す。ゆりり呂丸英士、う風義と慕ひく匂く  
秀す。小五とせありまじり身筋うまく吟友  
乃文正とれかく存命れ一西向、は室すと向候す  
やろく。復解るや厚地陶る焉。即堂  
木育れそろひと事あり。社

## 病牀吟

登れぬら小ばくもやう

辭せ

水音自や今ぞもゆゑある雲の雲

下居官附因松井

二王門より奥アシカニより内社ナカニより外社ヨリより社記曰毎歲九月晦日ニ山稚現下アシカニ十月朔且神童平出雲門大社同晦日歸座至アシカニ十一月九日下居アシカニ此官云之の故祭今小春アキナ年中冬アキナ九月湯丸夜成アシカニより一年吉色アシカニ神院あり則天下國家山上山下アシカニ古禍と諠アシカニ不アシカニ猪アシカニ者アシカニ山の神行アシカニ國十月一月里房アシカニ

下りぬれ神宿事畢アシカニ山上アシカニ而アシカニ諸社の

乃旅而アシカニ去アシカニ也アシカニ幸アシカニ信

ゆりかを経アシカニ而アシカニ行アシカニ也アシカニ幸アシカニ信  
ゆきといアシカニ神アシカニ而アシカニ行アシカニ也アシカニ此紅

猿アシカニ洞アシカニ而アシカニ入アシカニ也アシカニ此紅

白木翁アシカニ康アシカニ辭アシカニ而アシカニ行アシカニ也アシカニ李山

白木翁アシカニ康アシカニ辭アシカニ而アシカニ行アシカニ也アシカニ李山

## 大黑堂

人皇五十不<sup>アシカニ</sup>平滅帝内<sup>アシカニ</sup>伊寧大同三年不<sup>アシカニ</sup>靜修<sup>アシカニ</sup>清配流<sup>アシカニ</sup>此國<sup>アシカニ</sup>來<sup>アシカニ</sup>而<sup>アシカニ</sup>行<sup>アシカニ</sup>傳教大师<sup>アシカニ</sup>作<sup>アシカニ</sup>の太<sup>アシカニ</sup>是<sup>アシカニ</sup>安置<sup>アシカニ</sup>而<sup>アシカニ</sup>行<sup>アシカニ</sup>傳教大师<sup>アシカニ</sup>作<sup>アシカニ</sup>而<sup>アシカニ</sup>行<sup>アシカニ</sup>移<sup>アシカニ</sup>而<sup>アシカニ</sup>大<sup>アシカニ</sup>也<sup>アシカニ</sup>。一<sup>アシカニ</sup>衛<sup>アシカニ</sup>而<sup>アシカニ</sup>不<sup>アシカニ</sup>小<sup>アシカニ</sup>也<sup>アシカニ</sup>而<sup>アシカニ</sup>祐<sup>アシカニ</sup>黑<sup>アシカニ</sup>也<sup>アシカニ</sup>

賈小門くわい下山

李山

桃清冰

大僧正行尊おほなぎ也山やま也大年だいに也附近里へきり也懲病けいびょう也也  
もも小行尊こぎょう也月内げつない也那裏なり也加持かじ也水みず也吞  
毛も也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也也也

桃活とうかつ也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

羽黑  
安心

行尊隊

行尊こうそん也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

の鷹院たかのいん也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

系圖

三条院さんじょう也小一條院こいつせう也源基平

佐三佐号さざわごう

行尊

又向河院むかわいん也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

蘿髮らつ

二年にねん也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

明行めいぎょう也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

十

七歲しちさい也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

舉人しゆじん也難行なんぎょう也也也也也也也也也也也也也也也也

也

驗者けんしゃ也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也承久四年じゆくよんねん也補園城ふいんじやく也長慶保安四年じゆうけい

也延

暦カレン也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也也也

也

也也也也也也也也也也也也也也也

持經院心子ありも奉養ノくに隊れ中ノ一つの金  
札多々御多師大眾修行の所と爲ひるより  
モトヨリ多とて山宿代歌うれ金れり五つも  
と多く金札のれやと成りて云はゆるを察  
此宿代金縮荷太郎神と行至れ是はすいを穿ち  
居る所止あり。百年已往今仍感法被を  
わすまめなり。

龍膽を身に附けひそむし 惟然  
藤原れ年をよりて偶れ 実 風水  
情多き萬葉と名や 雲の草 羽黒 峯月  
松葉代 雪や伴御代 立宇 千露

受け手り爾不角のく金剛茶 今 枝  
東出と吟一かとくに偶う取 今 東洞  
見れほうくあせよや首と角 羽黒 峯也  
實方と相と稱くにあひよどり 立宇 立宇  
有りし久奈滿内橘小天盤中 吕筋

峯薬師

東北堂は當山入事修行れ内修驗行烈繞座乃所  
もて、拜乞く事すも多の爲ゆく一と云  
野山中生え流竄代せ界下 風虎  
うけ雲飛散る丸内見乃處で風 浮生

荒町

此山也。其頭至山之半有外福昌寺傳心  
寺也。山之半有寺比那利多子。今此山の内廉  
嶋石也。石あり岡内内鎮守と云ふ。

毎年當山禪定乃加古野數々一す雪もあらず  
捨餅也。道もよ高木事からず。山の形  
容乃似合ひ。旅客名物し賞歎せり。

執行酒冰

海門と云ふ。うそを拂流成馬澤と云。往來れん。

鳥崎

舊記云能除太子至羽峰時樹陰深鬱而路迷岐路  
時有翅八尺靈鳥二足來導未能除臻羽黑及用山等至

太子歡然而歌曰

彌也喜善禮遠能找播俱曾能也磨加羅須軒珥良  
迺志呂久那良年登滿天母  
蓋此山萬丈巖を絶壁に嘉瑞多如些れ禽獸不見  
タクモウ鳥れ酉也向く御りわが山れ多幸也寄生  
との稚猿多の山也。奈何今小玉にて  
山と山下寢て人所未至是れ鳥又も自居つゝもの  
知る事無し。あらわされ

晴和天氣多日。日暮。石立 神叔

是非。えみくを圍ひのがれ。呂茹  
うれ事や合ひよらすつとも崎 標也

鶴小路

是より左は鶴小路と云ひ、三百宿を鎮す。  
右へ入るや姓中納戸入日、天舞坂と云ふ者あり  
龍除石と天童寺跡、御子不動堂、引之名前あり。

ア傳

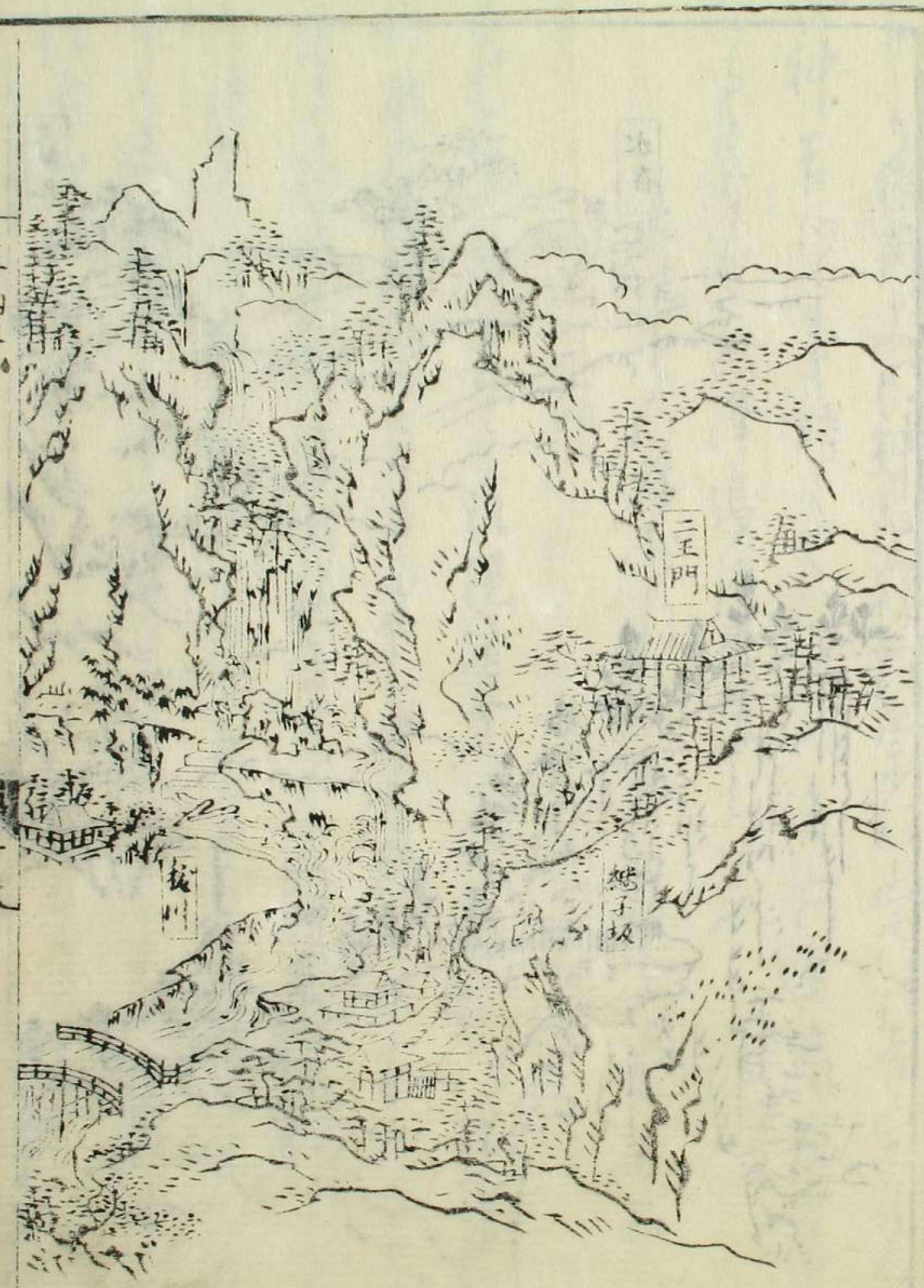
上糞町

古墓町と云ひ是より荒畠北へゆく野徑あり

下向館

あれ下り光明院主住す。此處に宿舗と云ふ。  
別名里坊屋浦と云ひ上向の事也。小田

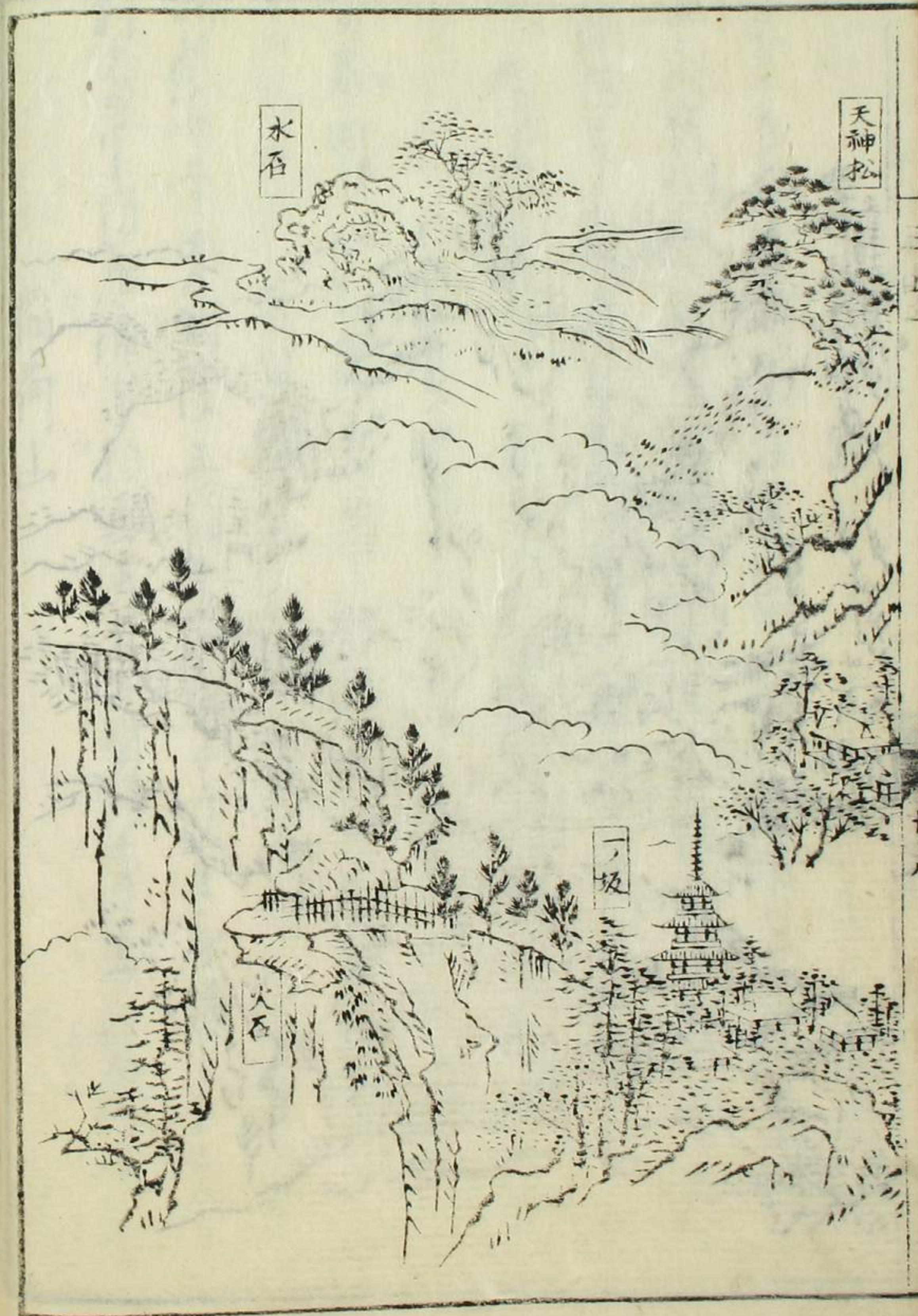
稻荷山



古より徳高き内神と称し常も山内代者也す  
必神若乃事時くや、あくもこの高嶽をも  
多からんこれ澤遍山是澤とソ  
冰丸尾内移らむと事よりか爲る。呂茄

二王門

此二王尊は弘法大師退道といひて禪宗の徒確  
丹誠乃志願ありたり第一院を建立一此下りるより  
居るの佛像が建立するとなれしもの二王尊  
も遠空より右れ觸て小舍ありまくは圓東より  
牛を奉納して事よりはまく牛廻転牛ハ湯殿院はの  
住者小て有り餘り既に而て之御歎すより一也



経子歌

ひう風の匂はれ内ノと中のるはくはくゆ  
此日よりまほりたまふされ事ハ遠ちてむらむら  
是れおりきよりつらぬくと音を諭す事ハ傳す  
縁より山シマ小子安地藏シタツヅルと安置せら事ハトナリ  
誠ハ身外肉スケレバおれおれハきみどりすとやね方カタを  
悲ハくれハせよハ哥ツチと西行ニシキ乃ハキリモアヨリ判  
トタモハくハいわゆの故ハまをか防ハる事ハと残ハり  
後ハせ更ハ恋ハ青ハ

下宿ハやあハれハとハ 因爲ハ乃ハ君ハ 介我

望ハ母ハの室ハや塘ハの名ハ傳ハい 羽思 其翠

それ母ハの室ハ計ハや累ハありとハ 鶴岡 李ハ  
色ハえハりてハ小處ハの秋ハれ蟬ハ山風  
あろハでハとハの胸ハ子坂ハ呂九  
便ハめハよハ椿ハよハ神ハす。もよこ草ハ李ハ  
もがくハくハとハとハとハの木ハの花ハ呂茄

白山官

吸ハふハれハ右ハれ方ハ本ハまハの中ハ勧ハ鶴ハ不ハ角ハ  
今ハ官ハ廢ハ廣ハ壇ハとハ傳ハ入ハ奉ハ拜ハ西ハ北ハ

鞍ハ

笠ハ下ハれハ中ハの鷹ハわハしハの川ハ云ハ仰ハ此ハ門ハまハ源  
湯ハ殿ハ月ハ山ハ乃ハあ間ハりハ漏ハ半ハ年ハ秋ハ清ハ水ハかハ往ハ青

うひ邊をせ小豆門と年々諸人身に此事  
又は國家の禍多く成るに萬能菩薩終年の久しう  
名聞高縉カツレより門下に多數有り其  
門と名付たり此不入りよく陀羅瑞羅の  
内をねむ往経れ人へ身心と法華堂廟をミヤとゆで  
石丸方の瀧而リ俱利伽羅不動の鑄像水中小室  
より游り度る飛泉スカイ朱霞玄谷外也自布設乃  
銀河の九天より萬丈と賦アサシトモ  
乃より之を以て

祓去凡塵淨有川

委波日影一繩金

秋

實傳

金繩界道瑠璃地瀑布垂幡千方尋

次韻

人世塵垢茲祓川心身瀟洒淨如金

秋

海秀

岩前仰視一條瀑彷彿飛龍下百尋

秋

李山

千首詠形月牙納

新作

酒田政盛

門縫の滝事不正月乃ひて御代とあがてて

水をうちやねきを流すとわされ 素堂

京

言水

粟翁ヨウ不動れ聲も深山うれ

秋

水

歎詠れまちあらんやつらむ川

桃躋

草刈乃野麻母のつゝみ後河 風木

背立門の朝涼早の爲れ上 東木

身よ病よ才人多のく所すす矣

洲水  
明里

雅カ浴衣なほ日をどう門戸へろ

親福

三月の白玉涼

令  
旭堂

船底と石うめむれ絆かな

梅露

月夜うれづせくすり湖は川

孤鶴

月と夜とあ乃布小名うちぬ

幸信

獨う金合れ浦

南枝

けくすくまつりい宿なりえ内瀧

其翠

御臺や云可有不唐之荷葉野

李山

彦平乃身緒ひあらそもひ月

吳柳

後川や道者小紙修も清く地

幽窓

### 念佛堂

時代中既不無爲尊容乃而至不り方くより乞う  
僧侶時く此不く爲するトーカサフ  
乞うと貴くぞ多く仕方

### 不動堂

作樂折草も御行く假荷とい 吕翁

和光山門桂院や号とこれ遠道此不く道れどく不  
退乃念佛所そりおひきりひんと極多く身内より  
ちゆうかへて懇願ト來ト今、西方の宝刹に歸れ  
くと貴くぞ多く仕方

### 造立と名爲し者一章ノ節

江戸  
沾徳  
松乃戸や即印の度紙市名義  
雁山

律院の巻より承へ 海棠堂 東水

八大堂

八大龍王窟洞——一字不すりも無く堂廬比模様魚鱗  
木はれかの窟形なり。其の堂ありて、うる相生竹  
とく幾年來と經りて、あれぞ所也ありて、堂より  
して、れあらず、年り所く、竜形哉、済の事もとく傳ふ  
そり此山の管理と龍形哉神祕也。まほろび人の  
一説、行きい難く、八大龍王の鎮護也。即ち事實、  
示す。——のうやう。中より、くるを、うなづく所也

五重塔

本尊之正觀音菩薩脇坐も軍荼利妙見の二尊也

泰平年中、平將門建立之。トハ不前敵頭通のば  
カ所施設とせらむ。由是以、思ひ付く武藏  
國神田社も社家に訖。大己貴命と宗奈り。とど  
孫道春が神社考小みれ。將門の靈は鎮もさうや  
すうふ乃様の教化。幅する車跡。因縁うるゝと進  
可考。

應永五年前駿河守藤原朝臣氏家再興之。同六年  
夏六月入佛供養時。導師天台沙門觀學院尊藏  
と古記録ととて、奉り。清れ四方小注報應化乃  
四字額あり。小野道風。之序より。ア侍角り

高顯幾、層雲幾、層天無翼、一飛樓、實傳

脫蓑仰見斗牛際 四萬由旬倦望眸

次韻

孤巍寶塔玉棲層 遐斷太清隣 月樓禪光

一迺慇懃三拜立 堂中聖顏共青眸

今一重雲多似行雲 はいだうわ

向雲下九輪のせたりよどみ

河東月  
旅人  
三扇

曉頭屋錦

曉乃多小あり羽黒代れ孚良誠げやく往々と小  
いすの高師タカシ里是驗高德タカヒコ僧サムライ男カガ康嶋カニマツ神カミ行ハシム  
キリ幕マツルより六月十五日羽黒山カニマツサン乃祭カミナリ祀カミナリ事畢マツルアラムノ勇  
康嶋カニマツの祭祀カミナリトキノハルチの道カミナリ行程三十有里カミナリト蘭ラムカニマツ

同日行向カニマツ不カニマツ飛行カニマツとカニマツのカニマツをカニマツのカニマツ所カニマツ天下大軍  
年屬カニマツ康民カニマツ新カニマツ雨カニマツ於狩筆カニマツ池邊カニマツ謫カニマツ江華カニマツ精雨カニマツ等經カニマツ二月之  
内洪冰霜カニマツ地輸カニマツ云カニマツの外奉カニマツとカニマツ通カニマツ賀カニマツ等量  
等カニマツの後カニマツ行カニマツ不カニマツ住居カニマツスカニマツ荒町宝勝院カニマツ小住カニマツ

天神社

天滿宮カニマツは常カニマツ參數カニマツ為カニマツれりカニマツ天カニマツ御カニマツ津カニマツ向  
いカニマツれ奉カニマツ小天神カニマツれカニマツうそカニマツのカニマツ大日臺カニマツ觀音臺カニマツ普賢

堂カニマツ等カニマツ境カニマツ内カニマツ一蓋カニマツ廟カニマツ

護摩臺普賢堂

右方カニマツ行カニマツ二十金段カニマツのカニマツ内カニマツ事カニマツ空カニマツ略カニマツ

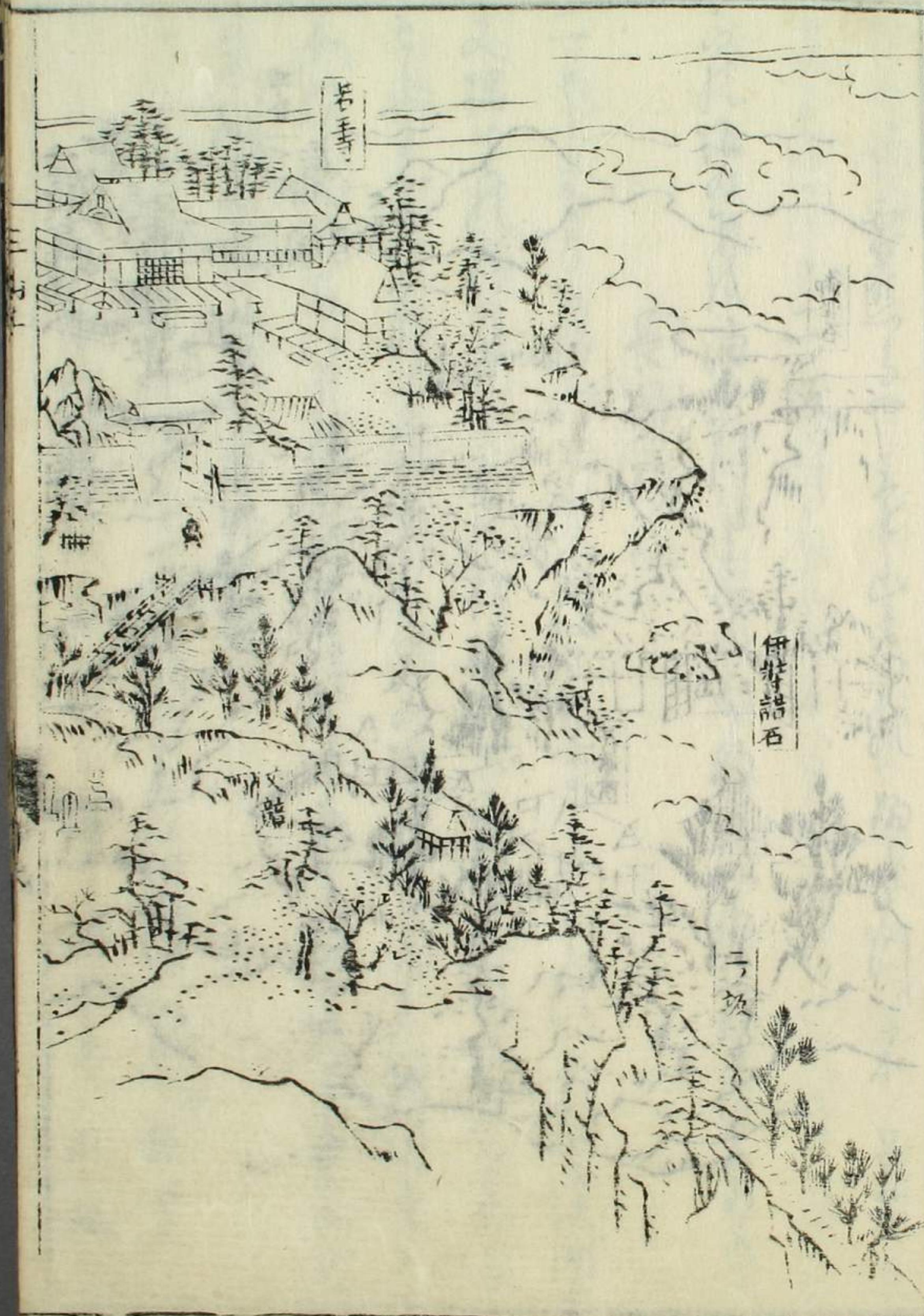
一ノ段

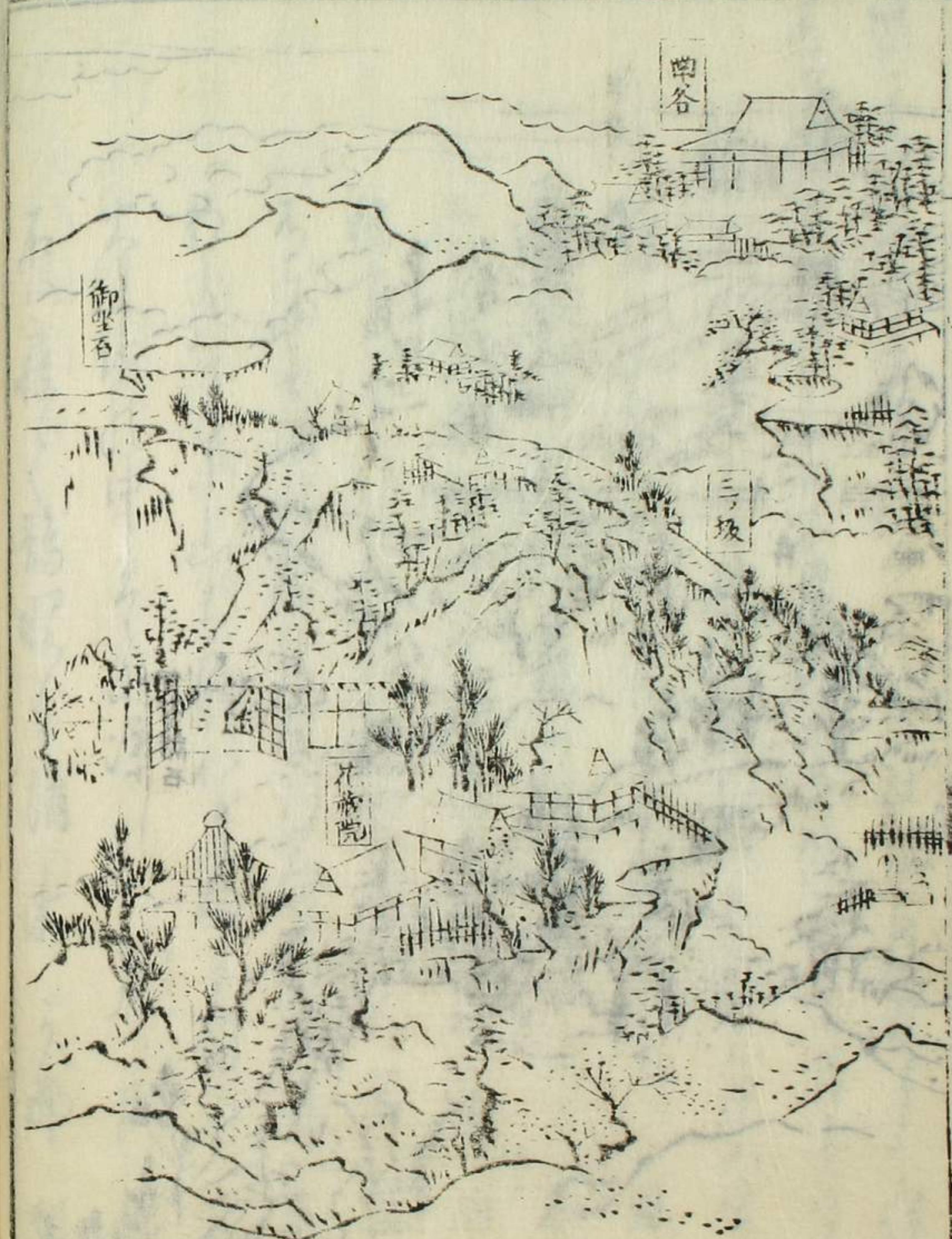
普賢堂の前より八幡坂の石段六百七十間余  
を代別角天宿江卯寄附くあれほの右の方祕密路  
といふ谷あり

## 大石

一れ段の下すありての石より西南方小島門と南野  
リと石清ありとく木石あり是と出羽代二つ石  
とく下往今來詩賦一賦一歌一詠と作ひ二石の  
事ハ後陽二氣托寄寓かくて大石の陽體居類一  
森羅草木の筋を附帶居者と今よおむく圓冥の  
夜月也の輪もとる端とく事特く也渡海  
の船人げひうり波日落すとある事とあり木石  
又雨露れ潤澤風はささり石中より冷々と靈泉  
と涌出するの流とく數あれ民草と所いわゆる  
早暑とし能と奇と妙とれ神あと申すとくの木  
石れ流すり石河と云ひ防二氣乃是石澤山山谷  
と陽の車足又まれ名いとくあれ相生の松え住吉  
や唐塔を闇のまろめの地とすとくよわづみの  
多羅德陽報信あれ御内石子郡行東宮見國  
家れちり山上山下乃人ほとく退勤をとく筆と示  
し給角り往詣此を爲等同其看守すとくすれ  
いとや山内一庵居ト向む候を仰りや仰り  
鶴う岡れ英士柳原氏水軒うの石室と信一室成

總う山々は多様の如く、社記古錄等不詳  
甚深也。奥祕や、當不農史れど何處に有るか、不  
おぞよ西山より、ゆき白石の傍に有る中野村  
數やり焉ちやれ矣。石屋山門  
石代もの新や、もじら所共はくト  
雪木下 編木下乃根石而江戸人喜運  
編木下乃根社れ乳や、ゆくら石 江戸人喜運  
石浦之編れ編木下乃根石而江戸人喜運  
わらえ木下乃根れ乳や、ゆくら石 江戸人喜運  
牛木代中 木下乃根  
義武此紅  
梨木





雪國の山を山あれ 鳴川石呂加

二ノ坂

長齋移山

二ノ坂の山の家は人跡なし  
又相生れ行かくとれ行ばれば又各れ行けとあ  
きよとどいの物す所以小もあめ衡れ下りて山に用事も  
ゆわべれらのまに石井と積みあひて乃至童子戲  
聚砂爲佛塔可思可感

雪國の山を山あれ 江戸石向はせん

江戸銀葉

雪國の山を山あれ 石向はせん 山風

地藏堂

別當へてある道者ありてゆく經不等と作建門

山王宮

此文中から廢壞するをいきまつて年東駿峯  
の願王院主吉宗擁護の神されば再興すゆむ  
えもくあれ玉酒すてび輝く一承く右家傳傳燈の守  
とめく坐候よ

伊勢諾山

若一王寺と号すと伊勢諾伊勢舞れ二神成崇してゆる  
生すかくは御石と大なる數ありて再興せら  
り西院寺と號す御生乃はち山荘宿とほし御と濃

喬答那

梅うす月松とがねれ殿うすも 東水

ひうつ伊と御と石内庵

羽黒 覧水

若王寺

けすいせく一山貫主職と寧うと伊勢散在の本領に檢  
勘をすみれ跡と伊勢諾山若王寺宝前院と号す  
當時東武輪王寺乃と并行而配して繁昌進日月門  
前より蓮池あり中ノ辨天宮ありそれ外靈佛祕寶來  
由の舊也高敞年は経くたやもく既しきにげちそ  
のゆき山うちもんじくは天宥法下け少く後よりそば  
天宥師乃事より五十せれ別當へてその曾祖不凡も

多う一山の棟梁あれはうまう芭蕉翁行脚の音  
半紙で一文寫り

芭蕉翁芭翁辨

羽黒山別當執行不分曇天宥法下、行法いよ。紀  
三月えふく止觀圓應の法智才用人小旅  
あ行ち山宿寄ら石屋割と巨靈うか女端うだ  
とくして防含は難かに階度船わる青雲の浦成  
しきく算れ木ととせんじ多石れ要本れ工。四山  
乃奇翁とおもひあ多く一山舉くそのまほ風慕ひ  
それ徳有あべて聞てふるやうい羽山圓基了  
等そぞれいづれの天皇代がむるよりあるも伴  
室の國八重れ津風うゆととふじゆく波の房

毛の御をそめりとくん若竹もやあの眉は下富三  
山御札の席追悼一句ももくとく門徒等をそめ  
に勅をくわくとくとく威言一句とけづね  
て番れ後つゝとく向竹の怪多き事すがん等も  
それをや明まくとくの爲をほん月

年はえ縁二年の所すとん翁行脚の行くと圖同呂元  
と約のとく別當代會覺と阿周利<sup>エフ</sup>と謂と南谷別當  
と會くとく情懸れ情五角やふあ向くとくふ  
は時れ一巻い其角うふも獨り役野と會て入師て是

芭翁芭翁芭翁の音

芭翁

呂丸

濃國名酒多く有ゆる野人呂内と亡人より是  
名のくあそり往う草々都の云ひて酒る一勝了了言  
りりをすう首略を

此年行強のは  
良夫れ様

僧正胤海

いやふく今宵は月小夜は度男ひいて泊れ奥の山亭  
寺こう林隱カナフ山に歸れに附モ 湖春  
極樂院の左山を西深降れ音 浮生  
モヒルやか申つて岸乃花カハ白鉢

文慶湖

高麗酒君王手よりわれ谷あひ不つうとその御高確  
の上人高山寺に登り此不手一も數日成達不確況乃  
日中も宿す無くねむ陽ハタケうれ 立宇

西行庚

西行法師登るれ車古紀アラシアリ鷦鷯スズメすあ行  
鷦鷯スズメの獨りありその行アリとけ下すよまくらうたま  
御ミコトすく、うわびぬれ御ミコトすくげ下すよまくらうたま  
まかく、中ミハく、西行稱アリといつて一本持マツテク  
れど是も中ミハく、西行稱アリといつて一本持マツテク  
山崎酒房アリうちや萬よこのを草 嵐雪  
車カマツけたり出と角アリまづ 水花

南谷

この所へよし石舟方より之町をかく行ふとまわう紫苑  
寺と号すを則て山修行院れむ所り上古いニ長吏五  
左遷院主職学政職夏一職めどいつる強き筆多  
たりける。今い此職子ゆゑに存せりもの寺れ下る  
紫苑も谷樹ともあり渟水といゆりそれとも伊勢  
主五十所門の壁あれ少く繕りありきる。やがて  
の小畠うちける事の様りうれどもいづれも古  
いりやア伊勢うるをや延室中と冬の内  
種れぬる。内れ人亦なしと云ふ後伊勢北  
十波川ゆゑへ詮と傳へゆらばり。故まれ人嘆すり

反魂梅發薰南谷 南谷活春萬國新實傳  
楓葉秋來好花好風光又愛好於春

次韻

南谷地靈人又傑宛然常愛物光新海秀  
櫻桃開盡楓林錦富貴風流秋與春  
冥加あへせむく古場れ伊乃とお 呂九  
木きうへ因れく所へとおと谷桃隣  
立木やねく千草まれしけれ 東水  
立木やねく底うねありタタキ此紅  
薔薇やまのむじとうとうれ茶れ匂ひ 李山

主より多めや本寧殿とばる南門の 梨水  
と御月や水をくけに鐘の音 不及  
主より多めや約とくに 补ホウ乃る 呂茄  
棒や十倍トモハシナフの小手行 行山風  
行山風と與そとくア花とて其翠  
并行より立れたり 鶴門苑 庭水

二ノ段

塔院上り也ハ隔えありかと九日流滴馬代神事  
既見由縁これもとひづる略也宝焉よりお聞成ハ  
まほしゆ

跡もと、鷺もと駒北もと立志

袖ひげく汗やぬ匂ゆく 雲境 此紅  
きねはとと竹ひきとれと拂拂れ 久武  
禮所院 善臺院 圓珠院 玄陽院 儀奉院 福乘院  
般若院今改号三學院 地藏堂アリ 右三十余院の内なり奉利と美略

花藏院

羽黒等中大差違の一すすり星を掌の手に臂而れ用  
基已可哉空窟月様りん寺院のうち靈宝故實等詳  
了了也一當往悟清海師も此院の規模わくて  
中興すと云へど大達立れあゆトその外一山代勅官  
それ勲功他に高もとすとく如是事もとく作の是  
と御さん鷺中近國遠達元寺院乃そ江當南東方出立

餘岩土形如名字是辨天社種字也御子ノ權現本社  
のえひ辨天堂のあより冷水涌出にて此院字は清  
いすら音奇異なりて穿井との木れど清  
冷ゆる如耳漏妙藥是空天女之感應不甚深半周  
名福寺本又呼本霧泉院此院の絕景鳥海山向小  
寂山門深くとく浪をくねり山のす風へ湯脇山  
乾き轍の跡すとある小石のあれば村屋えりと  
きぬ家なり

其忙行帆月夜の人生五度の船 無倫  
浦をもいきとけ船をもむれ 廉 東水  
山眉代よすしとうん 川 久武

宝徳院 南陽院 能林院

右三千金院のうちこれ能林院ノうひ

能除太子御壁石

往昔能除太子登山嶺のあらうるるの骨肉鳥の行  
御腰を拂られり生をもつて未仕け候。今高川能  
林院此院内にあらうるるあらたか所端。此不  
よ高川能除貴賤舞する事ふ事と御事と感故云  
太子昇天れたり。この清音のまわる所と止ま  
きらうるるゆく能除候。よし

其處不子そつゝ、石を育だる。又 水軒

主は防風、そぞの、苦の花、且松

平戴れ汗アラマラル石れ霜 立宇

### 十五章坂

瀧れ坂あり、毎天堂の多あま、ハサク、木ばけ、竹、や  
終行、金浦と云ひ、のあづり、阿つ

### 下花表

### 辨天堂

是往古よりの堂小て、確理本社の堂番、勧じ、弁天  
の權護、れ不思議經、ハ、讀歎、アラカヒ、此、每  
二の奇跡も、有り、アリテ、ノ、畠合、ア

### 能除害

太子代御、アリ、異國、詔給、シテ、ノ、アリ、モ、ト、中、の、正、御、バ、イ、ア  
舊記曰崇峻天皇第三王子、一名參拂理依形質頗爲募  
荒相放、北海濱然太子直歸佛門、詣而師于聖德太子以難  
髮染衣、爲法名弘海心性勇猛偏有凌雲志且離京城、棲  
遼濱往攀羽山修捨身行住阿久谷三秋衣以藤皮食以  
樹果、平日無他辭特信般若經力誦能除一切苦之文、又  
誦能所一切空之文故時俗呼曰能除仙、シテ、アリ、アリ、此時  
蘿我馬子謀弑天皇事見帝王略記等故太子出奔平又曰  
人王三十代欽明帝御宇至崇峻帝王子參拂理依天童  
之誥至羽州時片羽八尺靈鳥齋來而導登平羽峰拜生

身觀世音菩薩時讚曰善哉聖者修勇猛行一身善業普利千他當感見弥陀大日所居土則化成靈烏蠻揚月山及湯殿山且虛空詰曰我是羽黑神社也永欲使汝興吾山即授三面宝火珠云々至于此室大隱居以自娛之不見不動時王自臂放瑞光以照之則清淨常大是之有今此世小阿彌陀也渴願行者以此常方而用之まれ登巔齋時作常大臺の下ノ一處アリ載ス月山湯殿臺岩れと見奇蹟後下ノ洋中モ啟鑒矣至る山中ノ一峰建てる不凡寺院若干ノ防中ノ

羽黑山寂光寺 堂塔山瀧休寺 南流山禪定寺  
來光山千勝寺 下居山中禪寺 醫王山穢乘寺

不動山嘉祥寺 添川山和我寺 金龜山福王寺  
荒澤山廣澤寺 け外敷島形ノ怪ノ事トあるハ  
略々その上はまづ一尺上手乃新條は刻々安置し  
終リト付之

太子在世、嘗験廣大病、中ノ子ノ先太子山崖安樂の所  
うゝ巡里役病伏せし給申分川、縣主病焉一て三年  
腰脚痛、り敵々々頻々太子此高德得益、其慕ひの山  
巖より引くと則太子引りともも日復縣主の屋宅より  
少虫々々悉皆、らど病者とも引えを乞ひてゆくが、其の後  
ゆゑに御心附けり太子引りともも引きの屋宇、若しく  
痛じ少しづ病者と頃不愈へ腰脚のびつて、望康

不<sup>レ</sup>り是則能除一切苦<sup>レ</sup>經力般若<sup>レ</sup>智<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>病  
患<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>疾<sup>レ</sup>癒<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>固<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>て貴賤<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>恩<sup>レ</sup>示  
事<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>それ功<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>

上件の事<sup>レ</sup>は舊記乃<sup>レ</sup>趣意<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>獨<sup>レ</sup>筆<sup>レ</sup>は略<sup>レ</sup>誠<sup>レ</sup>  
太子代<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>は遍<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>予<sup>レ</sup>建<sup>レ</sup>寺<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>  
是<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>東<sup>レ</sup>都<sup>レ</sup>府<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>五十<sup>レ</sup>せれ<sup>レ</sup>到<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>宥<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
第<sup>レ</sup>覺<sup>レ</sup>禦<sup>レ</sup>院<sup>レ</sup>宥<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>納<sup>レ</sup>吉<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>レ</sup>息<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>  
は<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>すれ<sup>レ</sup>佛<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>平<sup>レ</sup>禁<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>錄<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>  
ト<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>引<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>源<sup>レ</sup>處<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>直<sup>レ</sup>接<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>  
ナ<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>と崇<sup>レ</sup>峻<sup>レ</sup>帝<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>宣<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>遇<sup>レ</sup>逐<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る  
有<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>降<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>徳<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>

左家科勅<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>議<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>往昔奧<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>俗<sup>レ</sup>迫<sup>レ</sup>夷<sup>レ</sup>  
勇<sup>レ</sup>抑<sup>レ</sup>羣<sup>レ</sup>奴<sup>レ</sup>抗<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>戴<sup>レ</sup>史<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>獨<sup>レ</sup>閑<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>驅<sup>レ</sup>  
猛<sup>レ</sup>獸<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>羣<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>遂<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>領<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>廷<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>藩<sup>レ</sup>  
屏<sup>レ</sup>且<sup>レ</sup>奧<sup>レ</sup>羽<sup>レ</sup>俗<sup>レ</sup>識<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>推<sup>レ</sup>現<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>佐<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>州<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>洛<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup>者<sup>多</sup>  
焉<sup>レ</sup>奧<sup>レ</sup>羽<sup>レ</sup>諸<sup>レ</sup>侯<sup>レ</sup>東<sup>レ</sup>征<sup>レ</sup>都<sup>レ</sup>督<sup>レ</sup>皆<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>幣<sup>レ</sup>帛<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>若<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>則<sup>レ</sup>危<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>  
此<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>崖<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>誠<sup>レ</sup>  
金<sup>レ</sup>剛<sup>レ</sup>佛<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>阿<sup>レ</sup>闍<sup>レ</sup>梨<sup>レ</sup>弘<sup>レ</sup>俊<sup>レ</sup>尊<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>坊<sup>レ</sup>雅<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>帝<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>勅<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>  
く<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>已<sup>レ</sup>來<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>誠<sup>レ</sup>  
法<sup>レ</sup>金<sup>レ</sup>永<sup>レ</sup>忠<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>祕<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>

未<sup>レ</sup>耳<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>菊<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>東<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>

在宇や竹乃木のよれからわくと 里船  
うり記と上人号れ本草と 貢樹は歴より水多原風  
景。みはらゝそれも此宥海法本れ本、はま應文年  
の比天宥師師事の活聲猶もと同と年年の多羽  
之へ活れつてふと峯中修竹やくくらる處根しつる  
者、うき音をうり拂ひせめぐらむね絲もあつて高く碎  
ゆく佛法僧といふ。靈鳥鳴くもすと此ちれよ、  
類い御見事もとと高野乃通念集とし半傳手すり  
かの奇本草本草の序すと序とも、やあらひて  
これ活家山門修學種魚くびとく又ふづり仰く  
とて天宥師と仰山中這ひたる草やあらくと寛永四

年正月二十六日玉と一云萬里扶桑とたゞを落  
りて、そゑとおとせとて、よしとせとて、通せ仰くくらる活  
坊倉れ一同と一首作れりとく

わがれ花のよれのゆうりとさくく仇うるせよゆう

神雲堂

三山雅理乃活興あれ堂すあり毎歲六月十四日  
祭祀の例是と出で

大峰小燈石壇

天下國家五勅暨營齋代初と執行職先達誠是と  
修行せし事あり紫打大繁打乃事也然の下小體  
あはと峯中の行事本ゆくに秘事事ざれし略く號

行職家之門於開山堂大饗あり

御影堂

當山別當執行四十八世宥源罕九世宥俊二代の沿革  
并いと取と忠羽守源義晃乃門後牌ありえん和年  
中ノ宥俊遠達

